

# 大阪赤十字病院 国内外の救援活動 2020

Japanese Red Cross Osaka Hospital International Medical Relief Department



2015年から水・衛生支援を継続しているシリア人難民キャンプ(レパゾン)



大阪赤十字病院 国際医療救援部  
公式フェイスブックで日々国内外の人道支援活動をアップしています  
<https://www.facebook.com/355328871229152/>



# 国内災害に備えた当院のフィールドホスピタル (ホスピタルdERU)の歩み

2009

## 国内型フィールドクリニック(dERU)導入

国内災害発生時に、すぐに医療チームを派遣して診療できるよう、トラックのコンテナに診療所を設営する設備一式を積み込んだdERU (Domestic Emergency Response Unit) を製作。平行して多職種で派遣要員の育成を開始。



2011

## 東日本大震災へ派遣

東日本大震災では発災直後に出発、翌日仙台の宮城県庁に到着。宮城県災害対策本部の依頼により、同県庁前で約1カ月間クリニック型を展開し、24時間診療。



2012

## レントゲン、超音波装置導入

野外レントゲンモジュールを導入。同時に救護員に放射線技師を追加。



2014

## ホスピタル型に拡張

全身麻酔手術ができる手術ユニット、ICU、病棟、職員の宿泊施設、トイレなどを加えて、ホスピタル型に拡張。



2015

## こどものためのこころのケアユニット追加

災害時の子どもたちのこころのケアが重視されつつあることを踏まえ、子ども用のプレイトントのユニットを作成。



2016

## 熊本地震で南阿蘇へ派遣

熊本地震では、トラック3台とマイクロバス1台で、被害の大きかった南阿蘇へ。長陽中学校前に外来、手術室、レントゲン室、子どものためのプレイルームを設営、約1カ月間診療



2019

## G20へ派遣

G20大阪サミットでは、咲洲の会場横に設営し、不測の事態に備えて4日間展開。平時で初めての設営。



# 海外の災害救援に備えた日本赤十字社のフィールドホスピタル (Emergency Hospital)の構築

当院の国内型フィールドホスピタルを参考に、海外用フィールドホスピタルの構築を2018年から始めています。2021年1月完成予定で、100床レベルの病院となります。国内大災害時にも活用されます。



2019年11月実証展開時

## パレスチナ難民の病院支援(レバノン)



レバノン国内のパレスチナ人キャンプで病院支援活動を行っています。支援先の病院では、救急室診療の質を高める活動を続けています。診療体制を整えるために、外来トリアージの導入や救急診療録(カルテ)の記載指導を始めました。個人の臨床力を強化するために外傷の初期診療講習も行っています。また、多数傷病者の搬送に備えた机上訓練を行い、病院内外の連携強化にも力を注いでいます。継続性のある支援するために皆で工夫を続けています。

## パレスチナ難民の病院支援(ガザ)



ガザ地区は1948年に多数のパレスチナ難民が戦禍を逃れて流入し、パレスチナ暫定自治区となりましたが、2007年以降同地区が封鎖され、住民の地区外への厳しい移動制限が生じました。ガザ地区の医師・看護師が地区外へ出る許可を得ることは非常に稀であるため、知識のアップデートの機会を得ることは困難です。従って、当事業においてはモノの提供ではなく、救急の共通診療プロトコルの開発、重症患者に対する診療手技、看護ケアの改善など診療の質改善等の技術支援をガザの2つの病院で行っていきます。

## シリア難民と周辺住民への水衛生支援(レバノン)



シリア危機から9年もの月日が経過した今もなお、テントで仮住まいの状態に置かれている人々が、レバノンには多く生活しています。シリア難民キャンプ(非公式居住区域)は物価の安い地方の僻地に形成されているものが多く、シリア難民にとって学校や医療機関へのアクセスは十分ではなく、冬季は洪水や豪雪などの自然災害に見舞われています。日赤は昨年に続き、1家族に1台ずつ新しい給水タンクとトイレを設置する事業をしており、同国北東部のベカー県と南部ナバティーエ県にある計5カ所の難民キャンプで暮らす100世帯を対象に支援が行われています。

## 中東地域紛争犠牲者支援事業(ヨルダン)



ヨルダンでは2011年のシリア危機以降65万人以上のシリア人難民を受け入れており、その80%が都市部で生活しています。都市部では援助団体からの支援は受けられず、就労の制限もあり、経済的にも苦しい生活を強いられています。受け入れ側のヨルダンも、人口増大による就職率の悪化や物価の上昇から貧困層の生活は圧迫されています。2018年からは政府の方針で、難民が支払う医療費が今までの5倍にまで増大しました。ヨルダン赤新月社と国際赤十字赤新月社連盟は医療へのアクセスが困難なシリア人難民とヨルダンの住民に対して、疾病予防や健康的な生活の啓蒙活動を行う、地域住民参加型保健事業を展開しています。当院は2014年の事業開始時から現在まで継続して職員を派遣し、ヨルダン赤新月社のサポート、予算管理、他団体との調整等を行っています。

## 学校防災事業(レバノン)



「未来」と「Library」を掛け合わせた造語「みらいびらりい」の名で親しまれている当事業は、子どもたちがより安全に学び、遊ぶことができる環境づくりを目的としています。レバノン赤十字社により選定された3つの学校を対象として図書室や講堂などの施設の改修工事を実施しています。日赤は「公立の学校であること」「共学であること」「地元レバノンの子どもだけではなく、シリアやパレスチナの子どもたちを受け入れること」等を学校選定の条件としており、男女比の報告も義務付けています。これらの基準は平等に教育を受けられる社会の構築をめざし、包括性を尊重する日赤のスタンスを体現しています。また、長らく母国が対立関係にある子どもたちがともに遊び、ともに学ぶ環境の整備を支援する当事業には、私たちの平和への想いが込められています。

## バングラデシュ南部避難民支援(バングラデシュ)



ミャンマーのラカイン州で2017年8月25日発生した暴力行為を機に、隣国バングラデシュへ70万人が逃れてきており、それ以前からの避難民20万人と合わせ現在なお90万人以上の避難民がバングラデシュ南部にある避難民キャンプで生活しています。2年以上経過した今も避難民の人々を取り巻く環境は厳しく、いまだに今後の目途が立っていません。当院は、2017年9月より避難民キャンプ内に診療所を開設した当初から現在まで、バングラデシュ赤新月社とともに保健医療活動を継続し、2018年5月より中長期支援として、モンスーンや大雨による土砂崩れの危険性が高く衛生管理が難しい環境において、避難民自らが災害や感染症などの病気に対応する力をつけるため、災害リスクの把握、救急法、病気の予防および健康衛生管理について啓蒙活動を行っています。

## 若手の育成「海外フィールドスタディ」

ヨルダン



当院では、若い世代の目を海外に向け、広い視野を持ってもらうことを目的に、海外の日赤事業地に、引率者とともに訪問する「海外スタディツアー」を毎年行っています。2019年の訪問国はヨルダンで、現地国連機関の協力も得て、シリア難民への支援、パレスチナ難民の支援の事業地を訪れ、見聞きし、現地の方々との交流をはじめ、さまざまな活動を行いました。



2020年度スタディツアーの募集は、当部署フェイスブックやホームページで5月頃に案内いたします。

# 若手の育成「体験ツアー」

これまで海外で活動をしたことはないが、興味があるという方を対象に、国内で1泊2日の仮想災害体験ツアーを行っています。仮想の国で仮想の災害が起こったというシナリオです。

講義だけではなく、物に触れたりテントを立てたり、また、無線を使わないと達成できないミッションがあったりと、さまざまな体験を通して災害派遣のイメージを持つことができます。





# 災害に **強い** 病院をめざして

国内活動

## 救護員研修

5月・10月



災害救護活動は赤十字の使命であり、当院では毎年100人を超える職員が救護員として任命されます。医師、看護師だけではなく、事務職員や薬剤師、放射線技師、理学療法士、調理師等職種もさまざまです。一人ひとりが被災地で最大限の力を発揮できるよう、年2回救護員を対象に訓練を実施しています。

## 親と子の防災セミナー「災育」

8月



災害拠点病院に指定されている当院は、災害時には重症患者を受け入れることとなります。そこに軽症の人が大勢来ると病院の機能が麻痺してしまいます。そこで、地域の小学4～6年生の児童とその保護者の方に対して、自分の身は自分で守る「自助」、お互いに助け合う「共助」の意識を高めてもらおうと開催しているのが「災育」というセミナーです。2019年度で10回目を迎え、約600人の親子が参加されました。

## 院内災害訓練

10月



地震や台風などの自然災害等が発生し、病院が被害を受けても、重要な業務を中断させない、中断したとしても可能な限り短い時間で復旧させるための方針、体制、手順を各部門が一丸となって考え、その検証訓練を行いました。また、外国の方が被災した場合を想定した訓練も並行して行い、訓練の検証を踏まえ、より災害に強い病院をめざします。

# 海外で活動する職員たちからのメッセージ



## 医師

国際医療救援活動に興味はあるけど…な君へ  
要員として海外に派遣されるには、英語力や多くの研修への参加と周囲の理解が必要です。医師として学会や日頃の臨床活動で活躍して十分なやりがいを感じているならわざわざ海外まで行かなくて良いかもしれません。でももし普通に勤務医をしていること以上に達成感を感じたいと思ったら…、私はそれで要員となりました。



## 薬剤師

山本敏晴さんの「世界で一番のちの短い国ーシエラレオネの国境なき医師団」を読み、国際救援活動に関心を持ちました。薬剤師は基本的にチームに一人しかいない職種であるため、他職種から意見や決断を求められる機会が多く、責任を感じる仕事ですが、他職種との連携力・プレゼン力が磨かれ、とてもやりがいがあります。



## 事務職員

私は前職から「人の命を救う仕事」に携わってきました。普段は国内救援課で災害に備え、資機材の管理を行ったり災害訓練に参加したりしていますが、念願叶い、2年前バングラデシュ南部避難民救援事業で初めて海外派遣されました。現地では電気や水、車の管理などを行い、国内での活動を活かせる場面も数多くありました。皆さんの経験がきっと役立つ世界がここにあります！



## 看護師

文化や言語の異なる地で国際活動を行うことは決して簡単ではありません。それでも続けたいと思えるのは、テレビのニュースで観るような困難な状況を現場で目の当たりにし、本当の姿を知ること、より一層少しでも力になりたいと感じるからです。国境を越えて、現地の看護師さんとともに「患者さんのために」と心をひとつにするとき、国際活動を続けて良かったと思えるかけがえない瞬間です。



## 看護師

私が国際救援活動を志したきっかけは、小学生の頃の社会科の授業で見た、アフリカの栄養失調の子どもの写真でした。『衣食住』に困ったことがなかった私は、『いつかこの人たちの力になりたい』と思いつけ、現在に至ります。皆さんが思い描く世界はどんな世界でしょうか。まずは一步、私たちと一緒に踏み出してみませんか。



## 助産師

国際医療救援部に憧れて当院に就職しました。憧れの活動に参加させてもらい、日々力不足を感じる一方で、パワフルな先輩方の活躍に刺激を受けています。国際救援活動に活かせるよう、現場での実践能力の向上に努めています。国際活動に興味のある方は、ぜひ勉強会に参加してみてください。



## 診療放射線技師

災害大国である日本国内での救護活動を通して、厳しい環境に置かれた人々の尊厳のある暮らしを守ることの大切さを肌で感じました。緊急事態や大規模災害といった限られた資源の中で、正確な診断と迅速な対応のために、赤十字の医療チームの一員として診療放射線技師が担う役割の大きさを実感し、この経験を国際救援に活かしたいと考えています。



## 臨床工学技士

普段の診療でも少なからず貢献できていると感じますが、国外に目を向けたとき、想像を絶する困難に直面している人々があります。私はフィリピン台風、ネパール地震、バングラデシュ避難民支援等に派遣されましたが、いつも感じることは、世界中の赤十字社が協力して支援を行っていることです。当院には国際活動を行っている職員が多数います。一緒にがんばりましょう。

## 大阪赤十字病院 国際医療救援部

〒543-8555 大阪市天王寺区筆ヶ崎町5-30 TEL:06-6774-5111 (代表)  
<https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/index.html>